

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 書物との出会いから研究   |
| Sub Title        | Studies by the encounter with the books   |
| Author           | 真柳, 誠(Mayanagi, Makoto)   |
| Publisher        | 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫   |
| Publication year | 2011  |
| Jtitle           | 斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.46 (2011. ) ,p.39- 47  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫開設五十年記念講演とシンポジウム古典籍の探求：<br>書誌学の世界<br>挿図  |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20110000-0039">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20110000-0039</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書物との出会いから研究

真柳 誠

### 一 『金匱要略』との出会い

東洋医学の基本古典はおおよそ後漢の一〜三世紀に成立し、現在まで中国系伝統医学に強い影響を与え続けてきた。それらは内経医書の『素問』『靈樞』等、本草書の『神農本草経』、仲景医書の『傷寒論』『金匱要略』の三系統に大別できる。しかし各書とも成立・伝承・書誌に未解決の問題が多く、原文の理解や臨床応用まで困難にしている。うち三世紀初の張仲景が編纂した原本に由来する方論書の『傷寒論』十巻と『金匱要略』三巻は、北宋校正医書局の校刊で初めて刊本として世に出現・普及した。かの葛根湯や八味地黄丸の出典で、健康保険が適用される漢方処方典の第一位は両書である。中国の中医药大学では必ず両書の授業があり、むろん研究室もある。それゆえ中国や日本の伝統医学関係者なら解説書の数書は必ず持っているだろう。にもかかわらず、『金匱』ではテキストとして使用すべき

版本に以前から定説がなかった。

たとえば『経籍訪古志』は明の四版（仮に①②③④とする）を次のように評価する。

①明・仿宋本（多紀氏聿修堂蔵）は南宋坊刻に基づき、訛字が頗る多い。

②明・兪橋本は①本と共通点があるが、江戸前期の和刻本があるのみ。

③明・趙開美『仲景全書』所収本（紅葉山文庫蔵）の部分では、和刻本の誤刻を指摘するが、趙本自体にはコメントしない。

④明・呉勉学『医統正脈全書』本は譌字が甚だ多く、③本より一等劣る。

けつきよく『訪古志』は善本を決定していないのだが、それは幕末の日本に宋元版がなかったためといえよう。このため諸家の見解はまちまちで、多紀元簡『金匱玉函要略方論輯義』と山田業広『金匱要略集注』は『医統正脈』本を、森立之『金匱要略攷注』は和刻兪橋本を底本とした。近代以降の医史学者も岡西為人は趙開美本、石原明は兪橋本、任応秋は近代活版『医統正脈』本を底本に推奨する。さらに『訪古志』が明・仿宋本を筆頭に掲げるにもかかわらず、前述の多紀家一門は誰も研究底本とせず、当本も明治以降は所在不詳となってしまった。

## 二 『留真譜』の書影から

ところで江戸医学館を主宰した多紀氏につぐ蔵書を誇った小島宝素は『留真譜』数冊を編纂し、それを入手した楊守敬が二〇余冊まで補訂していたことを陳氏が明らかにしている。この楊氏『留真譜』には『金匱』三版本の書影（仮にABC本とする）が載るが、むろん解題などなく、楊氏の『日本訪書志』にも『金匱』への言及がない。私は一



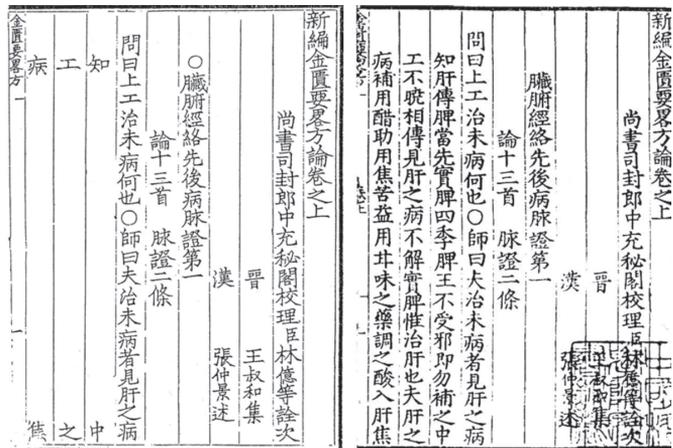


図2 『留真譜』C本（左）と『四部叢刊初編』本（右）

づけて報告した。<sup>5)</sup>ただしX本が宋版に由来する可能性を推測していたが、のち私が指導した野口大輔氏の修論『金匱要略』古版本の研究』（二〇〇五）により、X本も元の鄧珍本系統であることが見事に論証され、少々がっかりした。

真譜』B本の書影と一致するのみならず、多紀元簡『金匱玉函要略方論輯義』が校勘に引く「宋本」の字句とも一致する。したがって当本こそ『訪古志』のいう①明・仿宋本と確定することができた。他方、故宮の後書は『留真譜』C本の書影と一致し、『訪古志』の編纂にも関与した小島尚真が、和刻の兪橋本に五色の筆で他の五版本による校異を克明に記入していた。『留真譜』のC本は、『訪古志』和刻兪橋本の書影だったのである。のち気づいたのだが、明の兪橋本は一九二九年に『四部叢刊初編』に影印収録されていた(図2)。故宮の後書には校異に使用した五版本についても尚真が書き入れし、筆頭に医学館所蔵の「明刊本」を挙げ、「前輩(多紀元簡)おもえらく宋時の坊本なりと。いま審かにするに、明氏中葉の所刊たり」という。すなわち元簡の南宋本説、『訪古志』の明仿宋本説からトーンダウンし、単なる明中期刊本と判断する。これら諸資料が手許に揃ったので私も検討を重ね、『訪古志』のいう仿宋本は誤認で、兪橋本とともに元明間のX本に基づく嘉靖の無名氏刊本、と結論

〔元の鄧珍本〕

一九八三年の三月、北京の中医研究院医史文献研究所で馬継興教授に楊守敬将来本の行方など質問したところ、李盛鐸も日本で古籍を多数購入し、いま北京大学図書館にあるとおっしゃる。また『中医圖書聯合目錄』で『金匱』を

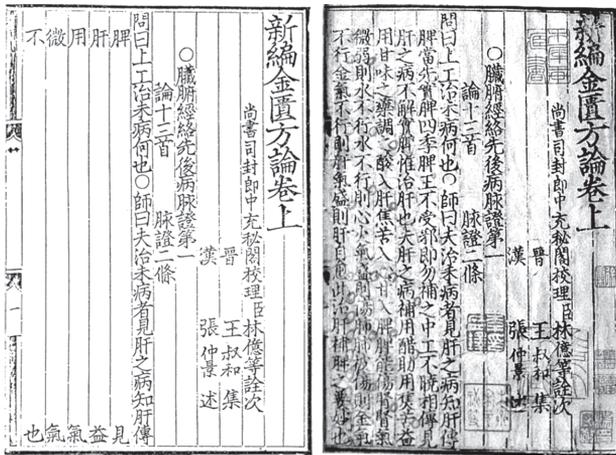


図3 『留真譜』A本（左）と北京大學本（右）

見ると『訪古志』にない元版が北京大にあり、楊氏の跋があると記されていた。北大の『李氏書目』で確認すると同じ記載があり、書名を「新編金匱方論」と著録し、『留真譜』A本と一致している。そこで北大院生の知人と図書館で見るとA本の書影とも一致するので、お願いして巻頭だけ撮影させてもらった（図3）。すぐに当本の貴重性を馬教授に話したところ、なんとかするとのことので、人に託して筆写したというコピーを帰国後の八四年三月に送っていた。

これを検討すると当版は元二三四〇年の鄧珍序刊本で現存最古版、かつ『訪古志』趙開美本の底本だったとわかった。しかし筆写本には私の調査記録や写真と合致しない点が少なくない。やはり写真を入力するのがベストとなり、やっと八六年夏になってマイクロフィルムと日本での影印出版権を得ることができた。これで研究が進み、鄧珍本は『永樂大典』や朝鮮『医方類聚』の所引底本、しかも既知

の明諸版より濃厚に北宋祖版の旧態を保有する善本であること。北大本は嘉靖間の新安修印本で、清初の袁廷禱と乾隆間の孫從添の旧蔵を経て、楊氏が日本から帰国後に上海で入手、のち李盛鐸に譲渡して一九三九年に北京大学が購入したこと、などを報告した<sup>(6)</sup>。それゆえ『訪古志』に未著録だったが、楊氏『留真譜』に書影が掲載されていたのである。鄧珍本は一九八八年に解題を付して影印出版することができた。一方、中国では二〇〇五年に『再造善本』の影印本、二〇〇九年に梁永宣氏の翻字・校注本が出版され、ようやく利用されるようになった。

### 三 明・呉遷写本(図4)の出現と大字本・小字本

私は野口氏の修論で『金匱』の版本問題はもう解決したと思っていた。ところが二〇〇七年七月、沈津『中国珍奇古籍善本書録』(二〇〇六)を見て驚いた。所蔵先無記の洪武二十八年(一三九五)呉遷鈔本『金匱』が載り、北宋紹聖三年(一〇九六)刊の小字本に基づく筆写で、その施行文および治平三年(一〇六六)刊の大字本進呈文がある。のみならず経文も通行本と一部字句が違う、と報告されているではないか。実は鄧珍本も含めた既知の『金匱』全版本には、紹聖三年の施行文も治平三年の進呈文も欠落していたため、両文の存在も内容もかつて一切知られていなかった。これで本物と直感し、諸目録で確認すると上海図書館にだけ明初写の『金匱』がある。沈氏も以前は上海図書館に勤務していた。ならば善は急げと同年九月に上海図書館に行き、沈氏の報告に間違いないことを確認した。

呉遷本の出現は従来の疑問を解決したばかりでなく、多くの新知見をもたらしてくれた。すなわち呉遷は『中庸五十義』など新出南宋版の裏面を利用して丁寧筆写しており、北宋小字本の旧態を濃厚に保持していること。北宋大字本と小字本『金匱』の刊年を以前は推測するしかなかったが、これを確証できたこと。既知の『金匱』諸版はこと



図4 吳選寫本：序末・巻頭

ごとく鄧珍本に由来し、鄧珍本は大字本に基づいていたこと(図5)。北宋校正医書局の林億らは、大字本『傷寒論』『金匱』等を刊行の際に伝本の字句を相当に校定していたが、のち国子監から安価な小字本を出版する際にも医官が再度校定していたこと。吳選本は康熙帝第十三子の允祥が最初に收藏し、清末の朱学勤・朱澂父子の所蔵を経て清民国間

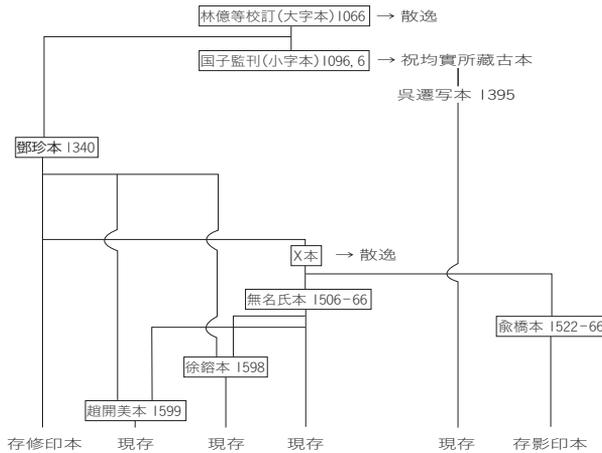


図5 明らかになった『金匱』版本系統

の徐乃昌に渡り、のち上海の私立合衆図書館と上海市歴史文献図書館を経て一九五二年設立の上海図書館に架蔵され  
こと等々。

なお北宋政府校刊の古医籍で、大字・小字の両系統が伝存する例は従来まったく知られていなかった。このため両者は大字・小字と版式の相違があるだけで、字句・内容は同じだろうと漠然と思われていた。ところが呉遷本と鄧珍本を比較すると、個々の字句のみならず条文や篇の配列まで大きく違う。字句には大量の修訂・補足があり、鄧珍本ほかで不可解だった内容が腑に落ちる。その一方、『金匱』の底本とされただろう唐本の旧から遠ざかっているに相違ない。他方、大字本の校定過度を改め、唐本の旧に復したらしい字句もある。すると今後は鄧珍本と呉遷本の双方を、同時に研究や臨牀のテキストとしなければならない。さらに『訪古志』が『傷寒論』の最善本と評価する紅葉山文庫の趙開美『仲景全書』（いま内閣文庫蔵）所収の『宋板』傷寒論を、かつて鄧珍本『金匱』と一緒に影印出版していた。しかし後の私の調査で、趙開美本には初刻本（上海図書館ほか蔵）と修刻本（台北故宮ほか蔵）があり、内閣文庫本は初刻本に基づく明末清初の海賊版で誤刻が多いこともわかった。ならば善本を再度出版するしかない。

ということで日本東洋医学会から援助を受け、鄧珍本の北京大学、呉遷本の上海図書館、趙開美修刻本の台北故宮から許可を得て、小曾戸洋・天野陽介両氏とともに三本の影印・翻字に解題・処方索引を付し、二〇〇九年に『善本翻刻』傷寒論・金匱要略』を出版することができた。呉遷本は二〇一一年に段逸山・鄒西礼両氏の整理で影印と翻字本が上海から出版され、梁永宣・趙懷舟両氏も鄧珍と呉遷双方の翻字解題本を北京から出版準備中という。私の『金匱要略』との出会いと研究も、これで終了だろう（と思いたい）。ところが他の北宋校刊医書については現存本が大字本系なのか小字本系なのか、という新たな難題が浮上してきた。しかし見分ける方法などあるのだろうか、いま私

は悩んでいる。やはり新資料の出現に期待するしかないのだろうか。

文献

- (1) 岡西為人『中国医書本草考』三二頁、大阪・南大阪印刷センター、一九七四
- (2) 石原明「金匱要略解題」(『影印明刊』金匱要略) 四頁、東京・燎原書店、一九七三
- (3) 任心秋『如何學習中医經典著作』三二頁、蘭州・甘肅人民出版社、一九八一
- (4) 陳捷『明治前期中学術交流の研究』四六六～四七五頁、東京・汲古書院、二〇〇三
- (5) 真柳誠・小曾戸洋「『金匱要略』の文献学的研究・第2報——明・無名氏刊『新編金匱要略方論』とその版本系統」『日本医史学雑誌』三五卷四号四〇八～四二九頁、一九八九
- (6) 真柳誠・小曾戸洋「『金匱要略』の文献学的研究・第1報——元・鄧珍刊本『新編金匱方論』」『日本医史学雑誌』三四卷三号四一四～四三〇頁、一九八八